

小牧長久手の戦い前の徳川・羽柴氏の関係

谷口 央

はじめに

近年、豊臣（羽柴）秀吉が、関東・奥羽に示した「惣無事」に対する研究が進められ、これまで藤木久志氏によって提示されていた「惣無事令」^① 平和令とする考え方が否定されつつある。^② ここでは、以前はすべてが天正十四年（一五八六）以降と考えられてきた「惣無事」にかかわる史料の内、^③ 初出史料については天正十一年（一五八三）であることが指摘されることになった。その結果、「惣無事」^④ 関連史料は年次比定が大きく変化した天正十一年と、残る十四年以降の二つの年次に分けられることになった。^⑤ このうち、天正十一年の「惣無事」については、羽柴秀吉から徳川家康に伝えられた関東の「惣無事」の要請（督促・要求）^⑥ は、家康を通じて北条氏に伝えられたとされる。

天正十（一五八二）・十一年の徳川・羽柴関係についての研究は、前記の「惣無事」研究に直接関係することもあり、近年多く見られるが、以前からもこの関係についての研究は見られる。すなわち、高橋博氏は、家康が天正十年十月以降、織田信長生前の「惣無事」たる秩序維持を計ろうとしていたと同時に、受ける側の北関東の中小領主側にも全体のまとまりを目指す動きである「関東惣無事」体制があり、家康がその体現者であったことを指摘されている。また、十一年十月に秀吉より家康に対し「関東惣無事」が示されることになったが、それは家康の「惣無事」を秀吉が認めることで、優越する上位権力者としての立場を示すためであったのであり、実質としての「惣無事」自体

は家康のそれとは一線を画していたとされる。

これに対し、近年、尾下成敏氏は、秀吉の東国への進出の意志は天正十年六月の本能寺の変直後から見られ、その後は家康との提携によりそれは推し進められたとされる。中でも、信長在世時の停戦状態への回帰を目指す徳川家康の「惣無事」が、天正十年十月の徳川氏と北条氏の停戦後推進され、翌十一年十月、家康を介する形で秀吉が関東の「惣無事」に関与し、北条氏と反北条の領主との停戦を推し進めようとしたとされる。また、秀吉からの「惣無事」実現の要請を、家康自身は拒否した形跡はないことも指摘されている。なお、尾下氏は豊臣（羽柴）政権の始期を検討する中で、この直後に起こった小牧・長久手の戦いの開始理由についても分析されており、ここでは秀吉による挑発説を否定し、同時に当事者の一人、織田信雄は戦闘開始一か月弱前の段階で、秀吉の計画する紀州攻撃への参加準備を進めていたとされる。⁽⁸⁾

尾下氏と同時期に「惣無事」を中心に徳川・羽柴氏の関係を追究された佐々木倫朗氏は、家康の推し進めた「惣無事」についての理解は、右の尾下氏の見解と同一であるが、具体的には不明とされながらも、家康の「惣無事」が二回に分けて実行されており、特にその二回目には秀吉からの情報照会や、その意向などの影響を受けたとされる。また、天正十一年十月段階に北条氏から秀吉の元へ使者が派遣される予定があった可能性も指摘されている。すなわち、徳川・羽柴及び羽柴・北条関係を、尾下氏と同等もしくはそれ以上に密接に見られる点の特徴となる。なお、秀吉による東国への介入を、天正十一年六・七月にあった反北条の関東諸氏との接触以降とされる点は尾下氏とは異なる。

以上に見るように、これまでは天正十一年段階での秀吉による直接的な関東への介入は、あまり意識されることはなかったが、近年、「惣無事」研究と密接にかかわり検討された結果、天正十・十一年の徳川・羽柴両氏をめぐる研究は、秀吉の関東への具体的な介入を認める方向へと移ってきている。その結果、その時期を何時とするかという点に違いが見られるなど詰め切れていない問題は残されるが、一方で、秀吉が関東での「惣無事」に触れた天正十一年十月末までには、すでに徳川・羽柴両氏の提携関係が成立していたことについては一致した見解となっている。また、

天正十一年の秀吉による関東での「惣無事」について、家康が秀吉に従う形で北条氏に伝えたとする点は、近年の天正十一年に関する「惣無事」研究全体を通じての一致した見解ともなっている。⁽¹⁰⁾

しかし、右に見た近年の研究に従うと、徳川・羽柴両氏は天正十一年十月末までには、東国での「惣無事」を通じて何らかの形で提携関係があったことになるが、一方で、わずか四か月弱で小牧長久手の戦いに突入したことになる。戦争に至るには準備期間も必要であり、その変化に至るまでの時間はさらに短かったであろう。しかし、なぜこのような提携関係が突如として正反対の戦争へと向かうことになったのかについては、尾下氏以外検討を加えられていない。しかし尾下氏についても、筆者はその関係を示すことに成功しているとは言い難い⁽¹¹⁾と考える。加えて、前記佐々木氏の研究の中には、小牧長久手の戦いを理解しているとは考えられない記載も見受けられる⁽¹²⁾。

小牧長久手の戦いは、年次的に「惣無事」関連文書の作成時期と密接にかかわるだけでなく、その当事者も「惣無事」に直接かわる。しかし、それらの研究と関連する形で研究が進められているとは言い難く、特に「惣無事」から小牧長久手の戦いに至る政治的理解については、検討の余地が残され则认为。そこで、本稿では近年の研究に学びつつ、本能寺の変以降の徳川・羽柴両氏の間係について検討していく中から、小牧長久手の戦いに至る過程を明らかにしていくこととしたい。

第一章 本能寺の変後の織田家臣団体制

天正十年六月に起こった本能寺の変後、織田信長亡き後の織田家を支えていく体制が創設された。この時の体制については、加藤益幹氏による詳細な分析がすでにあり、またこの体制下での徳川家康の役割については平野明夫氏による分析も存在する⁽¹⁴⁾。また、堀新氏によっても検討が加えられており、ここでは特にこの時期の体制について「織田体制」との名称が与えられている⁽¹⁵⁾。このようにすでに知られる事柄が多いが、一方、はじめに示した尾下氏の

ように、早い段階から、秀吉は家康と提携し東国への進出を意図していたとの見解も見られる。そこで、すでに明らかにされている点ばかりではあるが、行論上、この時期の織田家臣団体制の認識は天正十一年の徳川・羽柴関係を見るための前提となると考えることから、これら先行研究に学びつつ、同時期の徳川家康・羽柴秀吉の置かれた立場・役割について検討していくこととしたい。

信長亡き後の織田家の体制は天正十年六月の清須会議により定められた。その体制は、秀吉が「(織田)信忠様御子を取立申、為宿老共(標)もりたて可申と相定、御兄弟之儀(織田信雄・信孝)を同候へハ尤之由被仰出候間、四人之宿老共かやうにも可有御座と存、御誓紙(標)をしるへと、從清須岐阜へ御供申、信孝様(織田)若君様を預け申候事」と記すように、織田家家督を信長の孫である三法師(後の織田秀信)とし、それを柴田勝家・惟住(丹羽)長秀・池田恒興と秀吉の四人の宿老が支えるというものであった。⁽¹⁷⁾ また、それぞれ誓紙を交わしたことも記されるが、これは、秀吉が「(織田)信孝様・三助様、其外(徳川)家康誓紙并宿老共之一札以下、未来を大事ニ存、我等かたに所持仕候事」と記すことから知られるように、宿老四人だけでなく、織田信雄・信孝の二人の信長遺子と家康の三人も含むものであった。これについては、勝家が「於清須申究誓印之置目条々相違候而」と記していることから確認できる。すなわち、信長亡き後のいわゆる「織田体制」とは、三法師を織田家家督とし、それを四人の宿老が補佐し、そこに信雄・信孝の信長遺子二人に家康も加わる体制であった。

この中での家康の役割については、勝家が「(信濃国・甲斐国)信・甲之事、其後無異儀之旨尤候、後詰之敵、家康かたへ十余被討捕之由、彼一札自尾・濃被指越披見候、可然仕合候」⁽²⁰⁾、もしくは「家康手前之儀、度々被成御動座、武田一類悉被討果平均ニ被仰付御跡ニ候、殊更北条事、御在世中者毎事伺御意候処、立所替覚悟無所存候輩家康ト対陣、既実否究候段」⁽²¹⁾と記されることから、信濃・甲斐両国の旧織田領の維持が役割であったと考えられる。これについては、同時期に信孝が信雄による援軍が家康の元へ派遣されることを記すことや、また実際に信雄家臣の水野忠重が援軍として甲斐国へ派遣されていたことが確認でき、「織田体制」全体として認められた行動であったことが確認できる。

これに対し尾下氏は、この時期に家康が下野国の宇都宮国綱に宛てた書状の中で、「雖然上勢羽柴、^(秀吉)惟住、^(丹羽長秀)柴田始悉至当表出勢之催、敵方へも相聞候欤、一向無正体候、近々上方人数著陣候間、弥根切案之内候、於様子者可御心安候」⁽²⁴⁾とあることから、右に示す「織田体制」としての行動を認めつつも、同時に、この史料を根拠に「秀吉は北条氏の動向を意識し家康に提携を求めていた」とされ、両者の間に提携関係が存在したとされる。しかし、ここで出陣予定に名が挙がっている者は秀吉・長秀・勝家であることから、宿老全体を示すと考えられ、あえて秀吉個人の意識だけをこの史料から読み取ることとはできない。また、家康自身がこのような記述を行なった理由は、自らを「織田体制」の中に置くことを認識していたからと考える。以上から、家康についても自らが「織田体制」に含まれることを認識し、またそれを背景とする中で関東諸氏との関係を図っていたと考える。

対関東対策について「織田体制」として一致した行動を取っていたことが確認できたが、「織田体制」それ自体の運営に家康はどのように関わっていたのであろうか。また、どのように認識されていたのであろうか。これについては、天正十年十月末に起こった織田家家督の交代時にその様子が確認できる。

史料 1⁽²⁶⁾

尚以遠路御飛脚畏入存候 ^(織田信長)上様御かたき討、国々堅申付成安堵之思候之処、一年も不相立、か様之申事・悪心之輩出来候て、遠国へ之外聞如何と存、迷惑申候、已上、

去廿日御状、昨日晦日酉刻令拜見候、^(織田信雄)

一 其御陳無御心元存、先勢既三三介殿被申付候之条、追々人数可相立と存候処、成瀬藤八三先度如申合候、誓紙之筈被相違、^(勝家)柴田以所行三七殿被企御謀叛候条、此上者惟五郎左衛門尉・池田勝三郎・我等申談、^(丹羽長秀)三介殿を御代ニ相立、馳走可申ニ大方相究候、爰元弥手堅申付、家康可請御意と存候刻被仰越候、満足仕候事

一 五畿内人質不残召置候事

一 江州衆質物何も不残相ト申候事

小牧長久手の戦い前の徳川・羽柴氏の関係（谷口）

(輝元)
一 西国毛利弥別而無等閑申合候事

一 其表早御勝手ニ罷成候儀、我等一人満足中々不得申候、但諸事御分別候て家康御馬を浜松へ於被納者目出度可
存候、其上請御意諸事御為能様ニ馳走可申事

一 我等儀者爰を以致分別、家康御誓紙申請候上者、何様ニも御異見次第可仕候間、可有其御心得候事

一 其方従前々別而無御等閑申承候間、拙者事ハ家康御前之儀何様ニも任置申候間、御油断有間敷候、其表御手
前ニ候処、御懇之御状日来被懇御目候驗と存候、尚自是可得御意候条、此由御物語被仰上候て可給候、以飛脚
申上候、定而可致參着候間、不能巨細候、恐々謹言、

(天正十年)
十一月一日

秀吉(花押)

(数正)
石川伯耆守殿

御返報

三法師を守る信孝と勝家が謀叛を起こしたという名目で、織田家家督が交代されることになった。特に一条目に詳しく記されるように、それは勝家を除く三宿老の合議により決定しており、またその決定にあたっては「織田体制」に含まれる家康の承諾も必要であったことが知られる。実際に、家康は十二月二十二日付で秀吉に信雄の家督相続について祝意を表している。⁽²⁸⁾ なお、尾下氏は史料1の五条目の傍線部を、秀吉が家康に対し何らかの不満を抱いていたと読まれ、そのことから秀吉が北条との停戦に傾いたとされる。⁽²⁹⁾ しかし、この部分は、甲斐・信濃両国の状況がすべてうまくいくことは、私一人では満足の意を表すことはできない、すなわち、もっと多くの人の中で分かち合うほどすばらしい満足であるの意であり、家康に対する不満を記しているわけではないと考える。⁽³⁰⁾ そう考えると、尾下氏が言われるように、この史料から秀吉が北条氏との停戦を勧めたとか、個人的に家康と提携しているとすることはできないと言えよう。

以上、天正十年十一月にあった織田家家督交代に至るまでを見た。ここではそこに含まれる者全体として「織田体

制」を認識及び運営していたことを確認した。さらに、その中でも関東への対応については家康が担当していたことも理解できた。では、これ以降の「織田体制」はどのように認識されていたのであろうか。以下、天正十一年になってからの「織田体制」関係者の意識を見ていくこととしたい。

まず家康は、「就（足利義昭）公方様御帰洛之儀、預珍簡、殊信雄・羽柴其外家老之衆御請之書狀被差添給候」と記されるように、宿老の中では秀吉が抜き出た存在であることを示しつつも、信雄を織田家家督とし、それを宿老が支える体制であることを認識している。秀吉も同じく天正十一年二月の上杉景勝との同盟時に、「信雄江致披露候之處（織田信雄）、御入魂之儀別而満足被申候」と信雄を立てる様子が確認できる。これについては勝家との抗争時においても、秀吉が「殿様御人数被仰付于今被成御在陳候条」もしくは、「仍滝川左近・柴田修理亮与申談、对信雄企謀叛候（中略）峯城弥不逃散様ニ信雄被取巻处」と記すように、信雄に対し「殿様」と記し、またこの戦いの大義名分を信雄への謀叛とし、さらに尊敬語の「被」を用いている点から確認できる。

勝家との抗争終了後についても、五月二十一日付で「京都奉行職事申付之訖、然上公事篇其外儀、以其方覚悟難落着仕儀有之者、相尋筑前守、何も彼申次第可相極事（羽柴秀吉）」とあるように、信雄が前田玄以を京都奉行に任命していることが知られ、また六月十七日付で織田家臣の一人で越中国の佐々成政が新発田重家に宛てた書状で、「然者伊勢之国司ニ御すハリ候、御息様（織田信雄）、上様御時不相替天下被成御存知候、羽柴筑前万端御指南申儀候（秀吉）」とある。これらから、天正十一年六月末頃までは、信雄を織田家家督とする「織田体制」は形式的には維持しており、その中で秀吉が宿老の枠組み内で上昇する形で「指南」との立場になっていたことが確認できる。

以上により、本能寺の変後の家康と秀吉の関係は「織田体制」を支える立場同士としてのみで、秀吉が個人的に家康との提携を求めたとか、秀吉により関東への介入への動きが見られたとすることはできず、またその「織田体制」自体も、少なくとも天正十一年六月末頃までは形式的には機能していたことが確認できた。しかし一方で、後述する史料10に知られるように、天正十一年十月末には秀吉が家康に対し関東の「惣無事」についてその遅れへの対応など

を直接要請したことは事実である。また本章で明らかにできたのは、あくまで天正十一年六月末頃までであり、それ以降についてはいまだ明らかにし得ていない。そこで、家康・秀吉が「織田体制」の中で、もしくはそれを越えて、それぞれ関東諸氏とどのような関係を持ち、どのような対応を行っていたのかを、章を改め検討していくこととする。

第二章 徳川家康の関東諸氏に対する活動

本能寺の変が起こった天正十年六月二日、和泉国堺にいた家康であったが、帰国後の同月十四日には明智光秀を討つべく尾張国鳴海まで軍を進めていた。⁽³⁸⁾このときの家康の行動は迅速で、あわよくば光秀を自らの手で討ち、信長亡き後の織田家を従える盟主へとの思いがあつたと推測される。しかし、光秀は秀吉・信孝により討たれたため、家康は同月二十七日には予先を甲斐・信濃両国へと変更した。⁽³⁹⁾一時は光秀を討つことにより信長後継者としての地位を築こうとした家康にとって、当初の目標とは変更を余儀なくされたものの、甲斐・信濃両国支配から始まる関東地域での行動は、信長後継者への足がかりとする大きな目標であつたことに代わりはなかつたと推測される。

その結果、甲斐国に出陣し北条氏と戦うことになった家康であつたが、この時の様子は、宇都宮国綱によると、「仍氏直至于甲州張陣、家康被及対陣之由候間、為後詰義重令相談上野表江出張」⁽⁴⁰⁾とあるように、常陸国の佐竹義重と連携していたことが知られる。このことは天正十年十月末に結ばれた徳川氏と北条氏との停戦協定に、義重に加えて結城晴朝・皆川広照・水谷正村などといった、いわゆる北関東の反北条諸氏との通行の維持が含まれていることから確認できる。⁽⁴¹⁾以上から、家康は北条氏との戦闘状態の中、広域的に関東諸氏と連携していたことが知られる。

さて、十月末に北条氏と停戦協定を結んだ家康は、その直後、梶原政景・依田信蕃⁽⁴²⁾・水谷勝俊⁽⁴³⁾に対し、北条氏と停戦となったことを伝えた。

史料2⁽⁴⁴⁾ 徳川家康書状写

急度令啓候、抑今度各申合候処、上方申事在之付而、三介殿自御兄弟当表対陣之儀令無事諸事御異見等之儀、
我々^(等方)江被頼入候旨度々御理之条、任其儀氏直与和与之事候、其方如存知、我々年来信長預御恩儀不浅候間、無異
儀者落着候、其付而信長^(織田)如御在世之時候、各惣無事尤候由氏直へ申理候間、晴朝へ御諫言第一候、委細幡童斎可
為口上候、恐々謹言、
(天正十年)
十月廿八日

(勝俊)
水谷伊勢守殿

(徳川家康)
御名乗御書御判在

史料2に見られるように、北条氏との停戦は信雄・信孝兄弟の要請に基づくものとしており、また、信長との縁が深いことも記しており、まさに「織田体制」を前面に押し出していると言える。なお、信審・政景宛の書状については、北条氏との停戦を伝えるのみであるが、本史料では、そのことに触れた後に、信長在世時のような関東の「惣無事」について氏直に申し入れたこと及び、結城晴朝へもこの旨を伝えるよう要請している。これについては、史料中に「信長御在世の時候如く、おのおの惣じて無事⁽⁴⁵⁾」と記されることに加え、先行研究で指摘されるように、本能寺の変直前に、信長により関東地域での和平的状況が成立していたことが確認できることから、家康が北条氏との和平により、信長在世期に成立していた関東の和平状況への回帰をこの時関東全域で求めたと本稿でも考える⁽⁴⁶⁾。

では、この時の家康は、関東地域 of 「惣無事」の実現をどのように考えていたのであろうか。北条氏との停戦成立後の家康の動向を見ていくと、天正十一年三月末から少なくとも四月下旬まで⁽⁴⁷⁾、また同年八月下旬から十月初旬までの二回にわたり甲府へ出陣している⁽⁴⁸⁾。このことから、家康は北条氏との戦闘状態を解消したことにより、まずは本能寺の変以降新たに領国化した甲斐・信濃両国の安定化を目指したと考えられる。

続いて、停戦協定締結以降の北条氏との関係を確認すると、天正十一年三月に家康が、「其表別一和之以後、急度以使者不申入候之条、以松平玄蕃允申候、氏政宜被得其意候⁽⁴⁹⁾」と記されるように、家康は前年十月末の停戦協定の成

小牧長久手の戦い前の徳川・羽柴氏の関係（谷口）

立以来、北条氏と正式な形での使者のやりとりを取っていなかったことが確認できる。本能寺の変以降、関東諸氏の中で北条氏が唯一「織田体制」に反抗したことから知られるように、関東での和平体制を維持していくためには、北条氏を押さえることが重要であったことは、家康も十分理解していたと推測される。にもかかわらず、家康が北条氏と停戦後、正式な形で連絡を取っていなかったと言うことは、家康自身が北条氏との停戦さえできれば、信長在世期に一度成立した関東全域での和平体制Ⅱ「惣無事」が、自らの主導の下に（ただし「織田体制」を背景として）成立できるものと考えていたと言えるのではなからうか。事実、家康から他の関東諸氏に対しても、停戦直後の前に示した三点の史料を除くと、それ以降「惣無事」にかかわる何らかの指示は言うまでもなく、そのことに触れた形跡も見られない。これらを勘案すると、家康は北条氏との停戦が成立すると、そこで関東全体の混乱は解消するものと考え⁽⁵¹⁾、その後は自らの新たな領国となった甲斐・信濃両国の安定化を第一に進めていたと言うことになろう。

しかし、北条氏による北関東地域での戦争は、例えば天正十一年正月以降の上野国厩橋攻め、同年三月以降の同国沼田攻めなどに見られるように、家康との停戦後も止むことなく続いていた。そのような中、家康と北条氏の間で新たな動きが見られた。家康娘の北条氏直への輿入れである。

史料3

(朝比奈泰勝)

以鈴木申達候処、朝弥太被指添始中終御懇答、殊七月可被入御輿儀、猶以御儀定之旨被顕御状候間、愚拙歡喜何事と可遂之候哉、心腹難尽筆紙候、就中五ヶ条蒙仰候、一々御返答申述候、然沼田・吾妻急速可渡給由、弥御真実之模様、氏直大慶於拙者も忝候、委曲使を指添申入候間、具御返答待入候、恐々謹言

(天正十一年)

六月十一日

(家康)

徳川殿

(北条)
氏政 (花押)

史料3によると、家康娘の輿入れは七月に行う予定であり、また、それにともない家康から氏政に対し「五ヶ条」の要請があったようである。この詳細については、氏政が何も記していないため本史料のみでは不明と言わざるを得

ないが、そこに含まれる内容であつたのか、もしくはその見返りとしてか、沼田・吾妻を北条氏へ渡すことが家康から同時に伝えられている。では、このことは徳川氏と北条氏とのみの問題であつたのであろうか。またこの時の「五ヶ条」と記される家康の北条氏への要請とはどのような内容であつたのであろうか。まずは興入れ時の北条氏をめぐる情勢について見ていくことから、これらについて考えていくこととしたい。

家康娘の氏直への興入れは、洪水などもあり実際は同年八月十五日に行われている。⁽⁵⁴⁾ そのため、家康の北条氏との婚姻にかかわる動きは六月以降八月まで継続的に進められることになるが、その最中に古河足利氏家中から北条氏照に宛てた書状に「其已後御出馬ニ御落著候処、自遠州御祝言御使者来著ニ付而、御出馬被相延候様躰」とあるように、具体的な内容については不明ではあるが、北条氏自身が家康娘の興入れにより出陣を延期したことが知られる。また、沼田地域が北条領となることもあり、足利氏家中では「東口御静謐」となると考えられていたことも知られる。⁽⁵⁵⁾ これらから、今回、徳川氏と北条氏の縁組みが進められることにより、北条氏は実際に戦争の停止（延引）へと向けた動きを見せており、また、そのことが少なくとも足利氏家中の者には、実際に関東の和平Ⅱ「惣無事」と直接つながると考えられていたことも確認できる。以上から、北条氏への家康からの要請とは、大枠としては関東での和平、すなわち「惣無事」の徹底につながる内容であつたと推測される。では、このことは事実であらうか。また北条氏以外の関東諸氏へは、どのように伝えられていたのであろうか。続いて史料4・5から検討していくこととする。

史料4⁽⁵⁷⁾

(北条氏)

南衆沼田之筋へ押向之段、奉先達候キ、其已後新田近辺ニ在馬仕模様、巷説之違昨日朔日今泉但馬守所迄及注進

(透力)

候キ、可預御披露候之段相衆申候、定可被申上候、自家康沼田之地南衆被相渡可被請取于今ニ半途在陣之由候、雖然真田一円不承引、兎角之儀候由風聞、乍去果而者御事者不可被成候歟、此上於相替儀者早速可奉注進候間奉省略候、恐惶謹言

六月二日

皆川山城守

広照判

(宇都宮国綱)
宮

御館人々御中

史料4は、従来、天正十年もしくは十三年と比定される史料である。しかし、本史料では北条氏が上野国沼田へ軍勢を派遣していることに加え、家康が沼田の地を北条氏に渡すすることが記されるが、天正十年六月の段階で、この地の権限を家康が持ち得ていたと考えることはできない。⁽⁵⁸⁾ また、天正十三年とする場合、沼田へ北条氏が軍勢を派遣した時期は、氏直が同年九月八日付で「遠州衆於信州真田与対陣、沼田表へ之手合頻ニ所望候間、令出馬、森下城不移時日責落⁽⁵⁹⁾」とするように、家康と真田昌幸の戦闘状態にともなう出陣、すなわち閏八月以降となり本史料の六月とは異なる。ちなみに、天正十二年は沼尻の合戦の時期であり、天正十四年も氏直の沼田への出陣は確認できない。⁽⁶⁰⁾ 加えて、天正十一年六月に昌幸は沼田城の守備を強化しているようであり、また五月末に史料3に沼田と並んで北条氏に渡されることが記される吾妻で、北条氏と真田氏の間で戦闘があったことが知られる。⁽⁶²⁾ 以上から、本史料は天正十一年に比定できると考える。

史料4によると、今回家康から北条氏へ沼田の地を渡されることになり、それに備えて北条氏の軍勢が出陣中であること、この話に真田氏が不承引であることが記されている。このことから、本史料からも家康が天正十一年六月に北条氏との間で問題となっている上野国の沼田問題の決着を図ろうとしていたことが読み取れる。また、史料4及び翌日付の太田資正の書状写が北関東の諸氏の間で交わされた書状であると同時に、複数遺されることから、家康は、単に北条氏と徳川氏だけの問題としてとらえるのではなく、関東全域を意図した中で、沼田問題の決着と合わせて自らの娘を氏直へ嫁がせたと考えられるのではなからうか。これについては次の史料から裏付けられると考える。

史料5⁽⁶³⁾

尚以御無事之儀相調申様、御馳走偏可有御分別之由被申事候、

去此者預御狀候、再三拝見忝存候、則御報可令申処、彼御鷹師衆歸路之時分致他出背本意候、誠以失面目存候、其後ハ遠境ニ付而便宜不承、無音口惜存候、随而関東諸家中江惣御無事之儀、家康被申扱度之由候而、只今小倉松庵被差遣候、可然様御才覚祝着可被申候、尚奉期後音之時候、恐々謹言

七月廿日

(本多)
忠勝

(広照)
皆河山城守殿

人々御中

傍線部にあるように、家康は関東全域にかけての「惣じて御無事」を、自らの手で実現させたいとの意志を持っており、そのために小倉松庵を北関東の諸氏の一人である皆川広照に、徳川氏と北条氏の婚姻関係が決定したと同時に期に派遣していたのである。なお小倉松庵は、同時期に同じく北関東の水谷勝俊へも派遣されていたことが確認でき、家康が関東広域にわたりこの旨を傳達していたことが裏付けられる。

ここに天正十年十月以降の家康の動きをまとめると、家康は、天正十年十月に実現した北条氏との和平により、一度は関東の「惣無事」が実現できると考えていた。しかし、北条氏と関東諸氏もしくは真田氏をめぐる抗争が続き、実際は実現できずにいた。その結果、家康は翌年六月になり、何とか自らの手で再度関東全域の「惣無事」を図ろうと目論み、今度は自身の娘を北条氏に嫁がせる計画の中で、沼田地域の北条領への組み込みも含めた条件を提示し、また関東諸氏に対してもこのことを通知し、関東全域での「惣無事」⁽⁶⁵⁾ 信長在世期に実現した関東地域の和平状況の実現を目指したのであった。また、これらの家康による行動は、前年の北条氏との停戦時以来変化のない行動であることから、前章では確認できなかったが、天正十一年六月以降も、家康の意識としては、自らは「織田体制」に含まれ、またそれを背景として関東全域を自らの手で「惣無事」へと進めるということに変化はなかったと考えられる。

以上に見るように、家康は、天正十一年六月以降も継続的に、関東地域を自らの手でまとめようとしていたが、そのような行動を起こしている最中、家康は関東諸氏による秀吉についての情報を得たようである。すなわち、前に示

した注(64)の九月十五日付史料は、本多忠勝が水谷勝俊に宛てた返信となるが、その中には「仍上方儀筑前守何篇にも家康与人魂被申候、去月三日不動国行之御腰物、自羽筑家康へ被進之候、只今ハ大坂ニ普請被仕候、来春者京都をも大坂へ可引取之由候」とあり、秀吉との友好関係だけでなく、秀吉の大坂での様子についても詳細に記されている。恐らく、勝俊からの書簡に秀吉のことが記されており、それに対応する形で、このような内容が記されたと考えられる。本史料は先行研究では、主にこの時期の家康と秀吉の関係が友好であったことを示すことのみで用いられるが、読みようでは、不動国行を秀吉から贈答されていることを示すなど、贈答される側としての自身を示しており、友好関係(但し、本稿ではみずから「織田体制」に含まれる存在とする点が主と考える)に加え、秀吉に対抗している面も読み取ることができるのではないだろうか。そして、家康はここに記されるように秀吉の急成長を意識する中で、秀吉から直接関東の「惣無事」にかかわる史料を届けられることになった。これが、後述の史料10に示す、先行研究で注目されている関東の「惣無事」にかかわる史料である。

では、なぜこの時期に秀吉は家康に対し、関東の「惣無事」に関して伝える必要があったのであろうか。また、家康がこの時に目論んでいた関東の「惣無事」とどのように関係していたのであろうか。次章にて秀吉の関東諸氏との関係を見る中から、これらの点について明らかにしていくこととしたい。

第三章 羽柴秀吉と関東諸氏との関係

第一章でも少し触れたが、秀吉は天正十一年二月、上杉景勝との同盟関係を成立させた。この同盟を、竹井英文氏は、その内容を示す史料の一条目に「景勝・家康御間柄之儀ハ、各被仰分於有之者、筑前是非ニ可致馳走事」と記されることから、これ以前に締結されていた徳川・上杉同盟の存在を秀吉が認識⁽⁶⁷⁾し、また、この同盟関係の締結により、秀吉は天正十一年二月以来、秀吉・上杉・徳川同盟の完成による信長亡き後の東国の秩序再編を目指していたと

される。⁽⁶⁸⁾しかし、竹井氏自身が指摘されるように、これ以降も徳川・上杉両氏の領国の境目での争いは続いている。⁽⁶⁹⁾また本史料についても、三条目に「氏政・景勝御間柄之儀、対小田原御存分在之者^(北条)当方書状取替も在之間敷事」と記されるように、「景勝・家康御間柄之儀」と「氏政・景勝御間柄之儀」は並列で扱われており、片方だけを同盟的な関係と見ることはできないと考える。さらに一条目については、景勝と家康との間で何か問題が起こった場合、秀吉がその間に入って問題解決に努力すると記されるだけで、いわば自らも含まれる「織田体制」の一員である家康であるから、秀吉と家康との間は問題なく、その関係をもつて間に入ると伝えている以上のことは記されていないと考える。以上から、徳川・上杉同盟が成立していたと考えることはできず、同時に今回の羽柴・上杉同盟によって、秀吉が東国全体の再編を目指したとすることもできない。すなわち、今回の同盟はあくまで秀吉にとって上杉氏とはさむ形になる柴田勝家攻撃を主たる目的としたものであったと考える。

秀吉と景勝のこのような動きに対し、関東諸氏の一人で、前章により家康との連絡関係が確認できる佐竹義重は、景勝に対し「就中秀吉江弥被申合由肝要至極候、随而義重事秀吉江無一申通候、於時宜者可御心安候⁽⁷⁰⁾」と記すように、秀吉と景勝との同盟関係を歓迎している。また同じく関東諸氏の一人である宇都宮国綱も景勝に対し「殊秀吉近日御入魂候哉、猶以深重被相談、都鄙平均ニ可被廻御調略事尤候⁽⁷¹⁾」としている。このように、関東諸氏に受け入れられた羽柴・上杉同盟であったが、この関係は、当初の主たる目的であった柴田勝家滅亡後も継続されていた⁽⁷²⁾。

以上に見るように、羽柴・上杉同盟が関東諸氏に歓迎される中、今度は、関東諸氏自らが直接秀吉に対し、一斉に書簡を届けたようで、それに対する秀吉からの返書が複数遺されている。

史料 6⁽⁷³⁾

去六月廿六日之御札披閱本望之至候、如来書未申通候之处、遠路預示御懇意之段不浅候、

一 去年六月二日、明智企謀叛、夜討同前於京都信長御父子御腹召候、不慮之次第無是非題目候、其刻我等西国江^(光秀)

相働、於備中国城々攻崩、并高松与申城取巻候处、三方ニ沼抱力攻ニ不成之段筑前守見及、水責ニ可仕与存、堤^(織田)

を築、其国之川之事者不及申、備前国之川迄切懸、城内及難儀ニ付而、為後卷毛利・小早川・吉川五万計ニ而罷出、六・七町ニ令対陣可後卷ニ雖相定候、不能承引付而、弥城中令迷惑候刻、同四日已刻、於京都信長御腹召候由注進之間、右之高松六日攻崩、城主之事者不申及悉刎首候、則七日毛利・小早川陣所江切懸可討果覚悟候之处、色々令懇望、毛利相抱候国五箇国、其上人質兩人出候条、請取令赦免、即九日、播州姫路迄納馬候事、

(二か条目以下箇条書き部省略)

就中從信長御時、別而被仰談之旨淵底令存知候条、是以後何ニ而茂御用之儀可被仰越候、聊不可存如在候、恐々護言、

羽柴筑前守

(天正十一年)
七月廿九日

秀吉

(資正)
太田三樂斎

御返報

史料⁽⁷⁴⁾ 7

去六月廿九日芳墨披閱快然之至候、寔未申通候之处ニ被寄思召遠路預示候之段、畏悦不淺候、

(中略)

就中信長公之御時、別而被仰談之旨淵底と存候条、此以後何にても御用之儀可被仰越候、疎意に不可存候、恐々謹言、

(天正十一年)
七月廿九日

秀吉 (花押)

(重経)
多賀谷修理亮殿

御返報

史料⁽⁷⁵⁾8

去六月廿四日之御状拝閱本望之至候、寔遠路御音問難謝候、

(中略)

就中自前々被仰談儀候条、向後何ニても御用之義蒙仰不可存疎略候、尚御使僧任口上候条令省略候、恐々謹言、

(天正十一年)
九月四日

(晴朝)
結城殿

御返報

秀吉(花押)

参考として史料6のみ最初の一か条を示したが、これら三点の史料は、全体としては本能寺の変以降の秀吉の活躍ぶりが記されており、その記載内容に大きな違いは見られないため、その部分については省略し、史料の前後部について示した。これによると、史料8の宛先となる結城晴朝については、これ以前に秀吉と接触があったことが確認できるが、史料6の太田資正、史料7の多賀谷重経は、秀吉と直接連絡を取ったのは今回が初めてであったことが知られる。秀吉はこれら関東諸氏に対し、信長とつながりのあった方なので今後も疎意に扱うつもりはない、と信長在世中の関係を意識した中で返信を記している。なお、これらの史料はすべて元の書簡の作成日が確認できるが、返信までの日時は、初接触であった資正・重経についてはおおよそ一か月、晴朝については二か月強である。

ここで資正以下が秀吉に書簡を作成した日時に注目すると、これらはすべて六月末となる。これは前章で確認したように、家康が娘の北条氏への興入を進めている時期であり、同時に家康が関東諸氏全体に対しても関東の「惣無事」を自らの手で進めていた時期に該当する。しかし、この時期も関東諸氏と北条氏の攻防は続いていた。⁽⁷⁶⁾そのような中で関東の反北条諸氏が秀吉に積極的に初接触をしかも一斉に試みたということは、家康による娘の北条氏への興入れば、徳川氏と北条氏の関係強化となるだけであり、そのことが関東での「惣無事」につながるわけではない、むしろ逆に徳川氏が北条氏側に強く付くことから、今後は家康に頼ることは困難であるとの意識が強く生まれた結果、こ

のような行為が起ったのではと推測される。⁽⁷⁾ すなわち、これまでは「織田体制」として関東諸氏との直接的なつながりは家康一人に任されていたが、ここに来て、関東諸氏の方から家康を離れ、同じ「織田体制」でも、急成長する秀吉に頼る中で、自らの勢力を維持しようとの動きが出てきたと言いうことになる。

史料6・7にあるように、七月末に認められた秀吉の返書は、その返書が元の書簡から一か月後に作成されていることから、およそ一か月後となる八月末頃までには関東諸氏の元へ届いたと考えられる。そして、それを受けた関東諸氏のいずれかの者がその直後の九月三日付で改めて秀吉に書状を送ったようであり、それに対する返書と考えられる史料が次の史料9である。

史料9⁽⁸⁾

九月三日御札具令拝見候、

一 去夏先書ニ委曲如申入候、北国・西国不残申付候故、小早川・吉川両人事、去朔日ニ致出仕在大坂仕候事、

一 大坂事五畿内之廉目能所ニ候之間、居城相定、念を入普請申付、悉出来候之事、

一 御国之儀悉承届候、家康我等別而無等閑候之条、其表無事之儀モ可為秀吉次第候、相州之儀者不及事候、何モ不日慥之御使者可被差上之由候、旁其節可申承候、尚御使へ申渡候、恐々謹言、

(天正十一年)
十一月五日

秀吉(花押)

(宛先欠)

史料9は、宛先が欠如しているため、誰に宛てられたかを特定することはできないが、一条目を見ると、「去夏先書」に「北国・西国残らず申し付け候」とのことが記されていたとあり、これは史料6・7の箇条書き部にある本能寺の変以降の秀吉自身が記した自らの活躍と内容的に合致する。また先の書状を「去夏」とすることからも、本史料は秀吉からの返書である史料6・7もしくはそれと同様の返書を受けた者が、改めて九月三日付で秀吉に返信し、それに対して再度秀吉が記した返書と考えると問題なからう。

史料9は、一条目、二条目は自らの成長ぶりを記すことになるが、注目すべきは、家康のこと及び関東の情勢について記されている三条目である。本史料が返書であることから、このような記載が見られるのは、その元になる九月三日付の書簡に、例えば家康が現在関東での「惣無事」を推し進めているがそれが困難な状況であり秀吉からもどうかして欲しいなど、関東情勢の詳細、秀吉への要望などが記されていたと推測され、それに対する秀吉の返答がこの箇条と考えられる。そこで三条目について確認していくと、まず（現在家康が関東で「惣無事」を推し進めているとのことであるが）、秀吉は家康となおざり無い深い関係であるので、関東方面の「無事」についても秀吉次第であるとしている。注意すべきは、ここで秀吉が言っているのは、家康との深い関係があるとするだけであり、自らが直接関東の「惣無事」にかかわっているとしているわけではない点である。加えて後半では、いずれにせよ近日中に家康から使者が派遣されることである、と具体的な家康との間での動向について記している。⁽⁸⁰⁾ただ、この使者の到来は「由」と記されるように、あくまで伝聞的に記されるものであり、秀吉が厳密に使者到来の指示を出していたとまでは言えず、受け身的な状況が垣間見えることになる。⁽⁸¹⁾

こう考えると、本条からは、家康が推し進めている関東での「惣無事」については、あくまで家康が実行者であり、秀吉は直接は関与していなかったと考えられる。このことは次の史料から裏付けられることになる。すなわち、先の史料9に記されるように、関東での「無事」の、まさに「秀吉次第」に向けて、具体的に家康にその動向を指示するために発せられたと考えられる史料である。

史料10⁽⁸²⁾

従甲州御帰城之由候間、以一輪申入候、仍信州御手置等丈夫被仰付候由肝要存候、兼而又関東者無事之儀被仰調候由被仰越候、乍去于今御遅延^三候、如何様之儀^三而御座候哉、最前上様御在世之御時、何茂無御疎略方々^三候間、早速御無事^モ被仰調尤候、自然何角延引有之仁御座候者其趣被仰越候者御談合申、急度其御行可有之候、随而日向巢鷹弟鷹爰元^ニ者珍敷候間進上候、従九州近日鷹可上候由候間、重而可進之候、委細之段西尾小左衛門申含候、^(吉次)

恐々謹言、

羽柴筑前守

(天正十一年)
十月廿五日

秀吉

(徳川家康)
参河守殿

人々御中

史料9が作成される元となった関東諸氏からの九月三日付の書簡は、史料6と8の書簡の移動に費やされた日程から判断して、遅くとも十月中旬までには秀吉の元へ到着していたと考えられる。すると、史料10は、関東諸氏からの依頼を受ける形で、家康に具体的な関東での「無事」についての指示などを記したものと考えられる。ただ、同時期の天正十一年十月二日以降に家康から秀吉に対し、甲府からの帰陣⁽⁸³⁾などを記した書簡が送られていたようで、その返信としての意味も持ち合わせている。

本史料は、十月二日以降に家康から届いた書簡の情報については、文末に「由」が付けられており、甲府からの帰国、信州情勢の安定化の二点がこれに該当する。その後に「兼ねてまた」とあるように、これらに加えて、家康が関東の者の「無事」を推し進めていることが記されるが、ここでも最後に「由」が付けられている。これについては「由」と記されることや尊敬語の使用から、家康からの情報である可能性が高い。ただ、「兼ねてまた」と付け加え的に記されることから、他からの情報である可能性も完全に排除できるわけではない。ところが、この後の「今に御遅延に候」は「由」が記されておらず、少なくとも、それに遅れがあるとか困難な状況であるとの情報が、家康から秀吉に伝えられていたわけではないと考えられよう。すなわち、関東での「惣無事」の遅れなどについては、史料9の元となる関東諸氏のいずれかが秀吉に送った九月三日付書簡に記され、またその対処をこの人物が秀吉に要請したからこそ得られた情報と考えられる。だからこそ、秀吉は「何かと延引これ有る仁御座候は」と、明らかに北条氏を問題視する記載をするなど、反北条氏側の視点でとらえているのである。⁽⁸⁴⁾

以上から、史料10以前に秀吉が直接関東での「惣無事」にかかわったと考えることはできず、また秀吉が家康に関東での「惣無事」推進に対する直接的な指示を出した理由は、関東の反北条諸氏からの依頼によるものと考えることができよう。そして、史料10は、そのような依頼があつたため発給されたと言うことになる。そのように考えると、秀吉のこの時の関東での「無事」の要請は、自らの立案に基づくものではなく、関東諸氏と北条氏との間の和平交渉への仲介、すなわち藤井讓治氏が天正十四年以降の秀吉の「惣無事」について指摘されることと同様に、個別の和平・和睦の仲介であつたと言うことになる。また、この時に秀吉が家康に関東での「無事」について、自らの出馬も含めた今後の指示を出したことは、はじめにで紹介した高橋博氏が指摘される、自らが「織田体制」の枠組みの中で、優越する上位権力者としての立場を示すためと言えよう。ただ、そのような行動を取り、実際に急成長を続けていた秀吉であつたが、家康との関係で見ると、確かに踏み込んだ内容の指示を出しているとは言えるが、その実行についてはあくまで家康任せと言わざるを得ず、いまだ「織田体制」からは完全に抜けきれずにいたことが指摘できる。

では、これまで自らが進めていた「惣無事」に対し、今回介入される形になった家康は、これをどのように受けとめたのであろうか。これについては、すでに先行研究により知られるように、家康は特に秀吉に抵抗した様子は窺えない。ただ、秀吉がこれ以前、直接家康に対し「無事」に対する指示を出していなかったと考えられることや、実際に家康自身も「惣無事」が順調に進められていなかったことを勧案すると、従来研究の通りに家康が秀吉に従つたと見るだけではなく、家康がこれを「利用」する形で北条氏に伝えたとすべきと考える。

それでは、ここまで見た事象がその後に起こった小牧長久手の戦いとどのように関わるのであろうか。最後にこのことについて検討し、本稿を終えることとしたい。

むすびにかえて

本能寺の変直後に明智光秀を討つことから信長後継者としての名乗りを上げようとした徳川家康であったが、光秀は羽柴秀吉によって討たれ、それを達成することはできなかった。そのため、家康はその予先を甲斐・信濃両国へと変え、また「織田体制」を背景に、関東全域への影響力を示すことへとその目標を変更することとなった。その結果、家康は自らの手により、信長在世期に成立した関東全域での「惣無事」体制への回帰を目指し行動していた。それは言うまでもなく、関東諸氏を自らの影響下へ置くことにより、本能寺の変後に成立した「織田体制」内での主導権を握ろうとするためのものであったと考えられる。

そのためにも家康は関東諸氏と連絡を取り、また北条氏へ娘を輿入れさせるなど関係強化に進めていた。しかし、関東諸氏と北条氏をめぐる抗争は止むことはなかった。そのような中、関東諸氏の複数の者が、「織田体制」の中心的存在へと成長を遂げた秀吉と連絡を取り、それに頼ることで自らの勢力を維持しようとの行動が見られた（六月末及び九月三日付の秀吉宛の書簡）。そして、それを受けた秀吉から、直接関東での「惣無事」に対する指示を受けることにより（史料10）、家康は、関東諸氏の一部が自分ではなく、秀吉を頼る状況へと変化していることを目の当たりにすることになったのである。すなわち、自らが中心となって関東全域に影響力を及ぼそうと行動していた家康にとって、秀吉の影響力が関東にまで及んでいることを知らしめられることになったのである。

家康にとって、ここまでうまく進め切れていなかった関東での「惣無事」を推し進めるためにも、これを「利用」する形で一気に成立させ、何とか秀吉の影響力が入り込まないうちに自らの関東全域への影響力を保持・発展させようとしたと考えられる。しかし、これを受けた北条氏は、すでに知られるように、この直後の十一月末には、いわゆる沼尻の合戦と呼ばれる、関東諸氏との全面戦争に突入していき、家康は、自らの手による関東の「惣無事」がうまく行かないことを思い知らされることになったのであった。

この時、家康が打てる手としては、北条氏と縁を切り、秀吉及び関東諸氏と手を組んで北条氏を制するか、逆に北条氏との関係に従い、関東諸氏と同時に秀吉も敵に回すかの何れかしかなかったと想像される。しかし、前者の場合、「織田体制」の枠組みが秀吉中心であることを自らが認めることになり、これはこれまで意図してきた自らが「織田体制」の中心的存在となり信長後継者となろうとする目標の挫折を意味することになる。となれば、後者、すなわち、秀吉が成長を遂げきる前に直接対決を制し、自らを中心とする「織田体制」への再編成を早急に行う必要があったと言うことになるのではなからうか。筆者は、その結果、家康は同年十二月には秀吉との決戦に向けての準備を進めることになったと考える⁽⁸⁸⁾。

以上のように考えると、小牧長久手の戦いは、すでにその戦闘自体が関東での戦闘と密接にかかわることは知られるが、⁽⁸⁹⁾勃発まで含めると、関東での情勢が小牧長久手の戦いを招いたとすることができることになろう。では、小牧長久手の戦いは、本稿で見たように家康による「織田体制」の再編成と位置づけることができるのかという課題が残されるが、それについては別稿にて検討することとし、まずはここまで筆を擱くこととしたい。

(1) 藤本久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、一九八五年）。なお、本書にまとめられるまでの藤本氏の「惣無事令」にかかわる研究については、藤井譲治「惣無事令」はあれど「惣無事令」はなし」（『史林』第九三巻第三号、二〇一〇年）、第一章に、また、その後の「惣無事令」にかかわる研究の推移は同論文第二章に詳しくまとめられている。

(2) 以前からも、藤田達生『日本近世国家成立史の研究』（校倉書房、二〇〇一年）、三鬼清一郎「在地秩序の近世的編成」（岩波講座『日本通史』第11巻近世1、一九九三年）、同「惣無事令」について」（『歴史と地理』五九二号、二〇〇六年）など、「惣無事令」の存在、その認識自体に否定的な見解は見られる。

(3) これ以前の「惣無事令」関連史料の年次比定については、竹井英文「『関東奥両国惣無事令』政策の歴史的性格」（『日本史研究』五七二号、二〇一〇年）、第一章表1にまとめられている。

(4) 筆者は直接拝聴したわけではないが、竹井英文「『房相一和』と戦国期東国社会」（佐藤博信編『中世東国の政治構造』、岩田書院、二〇〇七年）注（43）にあるように、この指摘は戸谷穂高氏が最初である。その後、竹井英文・佐々木倫朗両氏による研究が続き、竹井氏は「惣無事令」関連史料全てを通じての「惣無事令」の理解を追究する中で、残る史料を天正十四年と比定され

ている（同氏注（3）論文）。また佐々木氏は、特に天正十一年の徳川・羽柴関係を見ることから、徳川氏の「惣無事」と、羽柴氏の「惣無事」の関係を追究されている（同「東国」「惣無事」令の初令について―徳川家康の「惣無事」と羽柴秀吉―、荒川善夫・佐藤博信・松本一夫編『中世下野の権力と社会』、岩田書院、二〇〇九年）。なお、戸谷氏自身も、「惣無事」の実態追究を進められており、そこでは「惣無事」とは、当知行によらず旧状回復を是とする秩序維持の手法を、周辺諸領主が一堂に会して承認し合う、東国領主間における和睦の一形態とされ、また該史料の年次を天正十五年と比定されている（同「関東・奥両国」「惣無事」と白河義親、村井章介編『中世東国武家文書の研究』、高志書院、二〇〇八年、初出二〇〇七年）。

なお、藤井讓治氏は前記注（1）論文で「惣無事」の実態が個別の和平・和睦の仲介であることを指摘されている。

- （5）尾下成敏氏は「督促」及び「要請」とされ（同「天正十年代初頭の羽柴秀吉の東国政策をめぐって―秀吉・家康の『惣無事』を中心に―」『史林』第九二巻第五号、二〇〇九年）、佐々木倫明氏は「督促」とされ（佐々木氏注（4）論文、竹井英文氏は「要求」とされる（同「戦国・織豊期東国の政治情勢と『惣無事』」、『歴史学研究』八五六号、二〇〇九年）。ただ、家康から北条氏へは、尾下氏は「要請を受け容れた」、佐々木氏は「伝達された」、竹井氏は「伝えた」とされており、基本的に秀吉の見解をそのまま「伝えた」とされるようである。

- （6）高橋博「天正十年代の東国情勢をめぐる―考察―下野皆川氏を中心に―」（『弘前大学国史研究』第九三号、一九九二年）。

- （7）尾下氏注（5）論文。

- （8）尾下成敏「小牧・長久手の合戦前の羽柴・織田関係―秀吉の政権構想復元のための一作業―」（『織豊期研究』第八号、二〇〇六年）。

- （9）佐々木氏注（4）論文。

- （10）天正十一年の「惣無事」を直接検討される近年の研究として、他に竹井英文氏の研究が見られるが、竹井氏も前に記すように、秀吉の「惣無事」を家康が北条氏政に伝えたとしてされており、特に両者間に問題があったとは考えられていない（竹井氏注（5）論文、二九頁）。

- （11）尾下氏は、注（5）論文で、家康挙兵の前提として、秀吉の東国への影響力が増していくことに警戒したとするが、そのきっかけについては、ルイス・フロイス書簡を根拠として織田信雄からの勧誘を受けて家康が出馬を決めたとされる。しかし一方で、注（8）論文では、信雄は戦争一か月弱前の段階で、秀吉の計画する紀州攻撃のための出陣準備を進めていたとしている。これらの見解は、一方は信雄が反秀吉としての行動を取ったとし、一方は戦争直前まで秀吉に従っていたとするものであり、戦争直前の信雄の状況認識に矛盾があることになると考える。なお、筆者は家康の挙兵準備は天正十一年十二月から見られると考えるが、これについては別稿で検討することとした。

- （12）佐々木氏注（4）論文では、注（77）に後述する天正十二年（一五八四）三月十二日付皆川広照書状（本多正信宛）が出さ

れた時を「小牧・長久手の戦いの前哨戦が開始された段階」(三六一頁)もしくは「小牧・長久手の戦いの直前の段階」(三六六頁)とされる。確かに小牧・長久手の戦いは、実際の戦闘は三月十四日に始まり、佐々木氏が指摘されるように「直前」かもしれないが、そこに向けての行軍はすでに六日から始まっている。また、そもそもこの戦いに前哨戦は存在しない。小牧・長久手の戦いの詳細は、拙稿「小牧・長久手の戦いから見た大規模戦争の創出」(藤田達生編『小牧・長久手の戦いの構造』(岩田書院、二〇〇六年、初出二〇〇五年)を参照されたい。

(13) 加藤益幹「天正十年九月三日付惟住(丹羽)長秀宛柴田勝家書状について」(『愛知県史研究』第一〇号、二〇〇六年)。

(14) 平野明夫『徳川権力の形成と発展』(岩田書院、二〇〇六年、第二章第二節、初出二〇〇三年)。

(15) 堀新『日本中世の歴史7 天下統一から鎖国へ』(吉川弘文館、二〇一〇年)。なお、研究上、同様の事象を示す言葉を安易に増やすことは避けるべきと考えることから、本稿でも信長亡き後の織田家臣団体制については「織田体制」の言葉を使用することとする。

(16) (天正十年) 十月十八日付羽柴秀吉書状写(『金井文書』、『愛知県史 資料編12 織豊2』、二〇〇七年、愛知県、三〇頁)。

(17) 「宿老」が勝家以下四人であったことは、(天正十年) 六月二十七日付で、堀秀政等への知行宛行状が勝家・長秀・秀吉・恒興の四人連署で出されていることから確認できる。なお、この時のこれら四人の署名順は定まっていない(『大日本史料』第十一編之一、七八〇頁以下参照)。

(18) 注(16) 史料。

(19) (天正十年) 十月六日付柴田勝家覚書写(『南行雜録』、『愛知県史 資料編12 織豊2』、九五頁)。

(20) (天正十年) 九月三日付柴田勝家書状(『徳川記念財団所蔵文書』、『愛知県史 資料編12 織豊2』、一五頁)。

(21) 注(19) 史料。

(22) (天正十年) 八月廿六日付織田信孝書状写(『木曾考』、『愛知県史 資料編12 織豊2』、一一頁)。

(23) (天正十年) 十二月十七日付徳川家康書状写(『下総結城水野家文書「水野記」』、『愛知県史 資料編12 織豊2』、二二三頁)。

(24) (天正十年) 九月十三日付徳川家康書状写(『宇都宮氏家蔵文書』、『大日本史料』第十一編之二、五四八頁)。

(25) 尾下氏注(5) 論文、七六七頁及び第二章註②。なお、尾下氏は、六月廿六日付羽柴秀吉書状(滝川一益宛、および九月廿日付羽柴秀吉書状(安東愛季宛)も含めて検討されている。ここで尾下氏は、信長の遺臣が和戦両様の構えであったとされるが、筆者もその可能性を否定するわけではない。しかし、前者の史料からは、家康が「織田体制」の中で関東への対応を行うとしたことを示すのみであり、ここに秀吉個人の意志を読むことまではできないと考える。また後者の史料は返書であることも勘案すると、秀吉文書に多く見られる誇張的な表現が含まれると考える。このように考えることから、筆者は本文中でも指摘する通り、この時期に秀吉が個別に家康と提携していたこと、もしくは秀吉が個人的に北条氏への攻撃を意

図していたとすることまでは本史料も含めて読み取ることとはできないと考える。

- (26) 「真田宝物館所蔵文書」(『愛知県史』 資料編12 織豊2)、九七頁。

(27) この時に合議があったことについては、(天正十年) 十月卅日付織田信雄書状などにより確認できる。なお、このことにかかわる史料は『愛知県史』 資料編12 織豊2)、九七頁にまとめられている。また、加藤氏注(13) 論文五三頁以下に詳細に記されている。

- (28) (天正十年) 十二月廿二日付徳川家康書状(『益田孝氏所蔵文書』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一二三頁。

- (29) 尾下氏(5) 論文、七九頁。

(30) また本箇条の以下の部分についても、ただし、(すべてがうまくいかなくとも) 家康自らの判断で浜松へ帰陣することについてはめでたく思います、と解釈する。

- (31) 尾下氏注(5) 論文、七九頁。

(32) (天正十一年) 二月十四日付徳川家康書状(『毛利文書』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一二四頁。なお、宿老中の位置付けは、清須会議直後の宿老連署状の署名順は不定であったが、天正十年の信雄への家督交代以降に見られる宿老連署状では「秀吉・長秀・恒興」の順に固定されている。また(天正十年) 十月廿一日付羽柴秀吉書状写(『相州文書』、『大日本史料』第十一編之二、七九八頁) に、「池勝之手前相済入魂候事」及び「惟五郎左事、勿論我等次第入魂」と秀吉自らが記していることが知られる。以上から、この時期に、「織田体制」の枠組みを超えない範囲で、宿老の中から秀吉が抜け出つつある状況にあったと考える。

- (33) (天正十一年) 二月七日付羽柴秀吉書状写(『歴代古案』、『大日本史料』第十一編之三)、六一〇頁。

- (34) (天正十一年) 三月十日付羽柴秀吉書状写(『秋田藩家蔵文書』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一〇八頁。

- (35) (天正十一年) 卯月十二日付羽柴秀吉書状写(『関関録四』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一〇八頁。

- (36) 天正拾壹年五月廿一日付織田信雄判物写(『古簡雜纂』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一一三頁。

- (37) (天正十年) 六月十七日付佐々成政書状(『石坂孫四郎氏所蔵文書』、『愛知県史』 資料編12 織豊2)、一一三頁。

- (38) (天正十年) 六月十四日付徳川家康書状(『吉村文書』、『大日本史料』第十一編之一、五九八頁。

- (39) 『家忠日記』(『増補続史料大成』第十九卷、一九七九年) 天正十年六月二十七日条。

(40) (天正十年) 拾月廿一日付宇都宮国綱書状(『大日本古文書 家わけ第三』伊達家文書之一、四八九頁。なお、本書では「天正十七年力」とするが、竹井氏注(5) 論文の注(30) で天正十年とされている。本稿では、氏直の甲斐国出陣と家康との対陣から、竹井氏の見解に従い、天正十年とする。

- (41) (天正十年) 十月廿八日付井伊直政覚書(『木俣文書』、『大日本史料』第十一編之二、八四九頁。

(42) (天正十年) 十月廿七日付徳川家康書状(「養竹院所蔵文書」、徳川義宣『新修徳川家康文書の研究』、徳川黎明会、一九八三年)、八一頁。

(43) (天正十年) 十月廿七日付徳川家康書状写(「譜牒余録」卷四十五、『内閣文庫影印叢刊 譜牒余録』中、国立公文書館、一九七四年)、四四九頁。

(44) (天正十年) 十月廿八日付徳川家康書状写(「譜牒余録」卷五十九、『内閣文庫影印叢刊 譜牒余録』中)、八五八頁。なお、本史料の「上方申事」を、前章で見たこの時期の信孝・勝家をはじめとする織田家中での騒動とされる場合が見られるが、政景・信審宛の史料にはともに「上方忿劇付而」と記すことから、「上方申事」とは本能寺の変自体と、それに連動するその後の騒動を示すと考ええる。

(45) 「惣無事」の読み方については水野智之氏よりご教示を得た。ここに記して礼としたい。

(46) 天正十年の信長による関東支配については、高橋氏注(6) 論文、柴裕之「織田政権の関東仕置―澁川一益の政治的役割を通じて―」(『白山史学』第三十七号、二〇〇一年)、齋藤慎一「戦国時代の終焉―「北条の夢」と秀吉の天下統一―」(中公新書、二〇〇五年)などに詳しい。なお、はじめにで触れたように、尾下氏注(5) 論文、佐々木氏注(4) 論文も同見解である。

(47) (天正十一年) 三月廿一日付徳川家康書状(「知久文書」、中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』上巻、日本学術振興会、一九八〇年、四八八頁)に、「我々も至甲府越山へ具可申付候」とあることから、これ以降、甲府に出陣したと考える。なお、本書解説(同所四八九頁)では、これ以降の家康による甲斐国での知行宛行の状況を勘案することから、三月二十八日から五月九日までを家康の甲府出陣期間としている。

(48) (天正十一年) 卯月廿二日付徳川家康書状写(「古今消息集」、中村孝也『新訂徳川家康文書の研究』上巻、五一九頁)に、「此方之儀も信表悉属存分隙明候間、頓而可納馬候」とあることから、これ以降に帰国したものと判断する。

(49) 「家忠日記」天正十一年八月廿二日条及び同月廿五日条に甲府出陣の記事が、また同年十月二日条に帰陣の記事が見られる。
(50) (天正十一年) 三月廿三日徳川家康書状(「思文閣古書資料目録 第百六十三号」一九九九年八月刊、徳川義宣『新修徳川家康文書の研究』第二輯、徳川黎明会、二〇〇六年)、六八頁。なお、本史料は宛先が切断されているが、本書では北条氏直もしくは氏規宛と推測されている。本稿でも、史料中で北条氏政に触れていることなどからこの見解に従う。

(51) なお、竹井英文氏も、本稿とは異なる手法ではあるが、「惣無事」という表現それ自体に過大な意義を見出すことはできない(「竹井氏注」(5) 論文、二四頁)とされている。

(52) 齋藤氏注(46) 著書、四三頁以降。

(53) (天正十一年) 六月十一日付北条氏政書状(「古案敷写」、『戦国遺文』第三卷、東京堂出版、一九九一年)、二四七頁。

(54) (天正十一年) 八月十七日付北条氏規書状写(「名将之消息録」、『大日本史料』第十一編之四)、八九四頁。

- (55) (天正十一年) 六月二十日付古河足利氏家中書狀案〔喜連川家文書案〕、『大日本史料』第十一編之四、八九四頁。
- (56) (天正十一年) 七月五日付古河足利氏家中書狀案〔喜連川家文書案〕、『大日本史料』第十一編之四、八九五頁。
- (57) (天正十一年) 六月二日付皆川広照書狀写〔小田部庄右衛門氏所藏文書〕、『栃木県史』史料編中世二、一九七五年、四六頁。ただし、本書では本史料の年次を天正十年とされている。また『大日本史料』第十一編之十七では、天正十三年と比定されている。なお、翌日付の同じく宇都宮国綱宛太田資正書狀写〔小田部庄右衛門氏所藏文書〕、『栃木県史』史料編中世二、四六頁も、「氏直有長津、直ニ沼田江勢遣候由無是非奉存候（中略）沼田之地南衆被詰取由候」とあり、氏直が長陣かつ沼田へ軍勢を派遣していることが記され、また「来秋先年之御調儀極候」とあるように、来る秋には先年の調儀が決まる、すなわち、北条・徳川の停戦協定以来の関東全域にわたる停戦状態が秋には調うとの見通しが述べられていることから、史料4同様に天正十一年と比定する。
- (58) 竹井英文「戦国・織豊期上野国の政治情勢と「沼田問題」」〔古文書研究〕第六九号、二〇一〇年、五一頁。
- (59) (天正十三年) 九月八日付北条氏直書狀〔東京国立博物館所藏文書〕、『群馬県史』資料編7 中世3、一九八六年、九三八頁。
- (60) この時期、北条氏は下野国壬生をめぐり、宇都宮国綱・佐竹義重などと争っている時期であり、事実、七月に氏直が壬生へ出陣している。このようなことから、天正十四年六月初旬に氏直が長陣の上で、上野国の沼田に出陣していたと考えることはできない。なお、この時期の壬生をめぐる抗争は、齋藤氏注(46) 著書、一二二頁以降に詳しい。
- (61) (天正十一年) 六月十七日付真田昌幸書狀〔矢澤文書〕、『大日本史料』第十一編之四、六八四頁。
- (62) (天正十一年) 五月廿七日付真田昌幸朱印狀〔河原文書〕、『神奈川県史』資料編3 古代・中世(3下)、一九七九年、一〇〇二頁。
- (63) (天正十一年) 七月廿日付本多忠勝書狀写〔皆川文書〕、『栃木県史』史料編中世一、一九七三年、一九二頁。なお、本多忠勝は徳川家臣である。
- (64) (天正十一年) 九月十五日付本多忠勝書狀写〔中村不能齋採集文書〕、『大日本史料』第十一編之五、六九頁。
- (65) 佐々木倫朗氏も、史料5及び注(64) 史料を根拠として、本稿と同様のことを指摘されておられる(佐々木氏注(4) 論文、三三頁以降)。ただし、本稿で見ると、それを家康娘の氏直への輿入れと関連させているわけではない。
- (66) (天正十一年) 二月七日付石田三成等三名連署書狀〔片山光一氏所藏文書〕、『上越市史』別編2 上杉氏文書集二、二〇〇四年、三七六頁。
- (67) 竹井英文「戦国・織豊期信濃国の政治情勢と「信州郡割」」〔日本歴史〕第七三八号、二〇〇九年、二二頁以降。
- (68) 竹井氏注(67) 論文、二四頁。
- (69) 竹井氏注(67) 論文、二二頁以降。

(70) (天正十一年) 四月朔日付佐竹義重書狀写〔景勝公御年譜〕卷十、『上越市史』別編2 上杉氏文書集二、三九七頁。

(71) (天正十一年) 五月二日付宇都宮国綱書狀〔上杉古文書〕、『大日本史料』第十一編之四、四六二頁。

(72) 例えば、(天正十一年) 七月十一日付羽柴秀吉書狀〔大石文書〕、『大日本史料』第十一編之四、七六〇頁) に、景勝方の「証人」が秀吉の元へ届けられたことに満足している旨の記述が見られることから、同盟関係の強化が進んだと考えられる。なお、実際に「証人」が秀吉の元へ届けられたことに對し、跡部信「秀吉の「人質」策―家康臣從過程を再検討する―」(藤田達生編『小牧・長久手の戦いの戦いの構造』、初出二〇〇五年、二〇二頁以降) では否定されていると見なして良いと考える。景勝の關係については、実際に「証人」の有無に關係なく継続していると見なして良いと考える。

(73) (天正十一年) 七月廿九日付羽柴秀吉書狀写〔福島於菟吉氏所藏文書〕、『大日本史料』第十一編之四、七八二頁。

(74) (天正十一年) 七月廿九日付羽柴秀吉書狀〔常總遺文〕、『大日本史料』第十一編之四、七八四頁。

(75) (天正十一年) 九月四日付羽柴秀吉書狀〔佐竹文書〕、『大日本史料』第十一編之四、七八八頁。

(76) 齋藤氏注(46) 著書 四七頁以降。本書では、天正十一年二月以降、厩橋城をめぐる攻防が見られ、また九月十八日の城明け渡し以降も、その後の沼尻の合戦に続く攻防があったことが記されている。

(77) ただし、皆川広照に見られるように、すべての関東諸氏が家康を見限り秀吉を頼ったわけではなく、家康の影響力は縮小しつつも残されていたと考える。広照が、家康をこれ以降も頼っていたことについては、(天正十二年) 三月十二日付本多正信宛皆川広照書狀〔三浦文書〕、『群馬県史』資料編7 中世3、九〇六頁) などに知られ、またこの詳細については、高橋氏注(6) 論文などに詳しい。

(78) (天正十一年) 十一月五日付羽柴秀吉書狀〔常順寺文書〕、『大日本史料』第十一編之四、七九二頁。

(79) 本史料では「惣無事」ではなく「無事」と記されている。ここに家康・秀吉両者の認識の差が現れている可能性があるが、秀吉のいわゆる「惣無事」關係史料すべてを通じて理解する必要があることから、本稿では、まずはこのような差異があることを指摘するにとどめる。

(80) 佐々木氏は「北条氏より使者が派遣される見込み」(同氏注(4) 論文、三五六頁) とされ、竹井氏は「家康・北条氏ともに近く使者を派遣してくるだろう」(同氏注(5) 論文、二八頁) とされるが、ここでは使者を差し出す者に対し、尊敬語の「被」があることから、秀吉へ遣わされる使者の主体者は家康と考える。

(81) なお、残る中間部の「相州の儀は及ばざる事候」の部分解釈するにあたり、その前後の文章について改めて見ていくと、その直前には秀吉が直接北条氏とかかわっているわけではなく家康との關係を記しているだけであり、またその後も、直接北条氏との關係を示すのではなく、家康からの使者の派遣を記しているのみである。これに加え、「相州之儀モ」ではなく「相州之儀者」と記することから、直前の文章にある「其表無事之儀モ可為秀吉次第候」と直接つながるわけではないと考える。

以上より、「北条氏とのことについては直接かわってはいない」と解釈できるのではないかと考えるが、その確定については後考を待つこととしたい。

(82) (天正十一年) 十月廿五日付羽柴秀吉書状 (『武徳編年集成』、『大日本史料』第十一編之五)、二〇二頁。

(83) 『家忠日記』 天正十一年十月二日条。

(84) 前章で明らかのように、徳川氏と北条氏の同盟関係は天正十一年六月以降に強化されており、また北条氏と関東諸氏の抗争の源となる沼田地域については、家康が北条氏へ渡すことを承認している。このようなことから、家康が北条氏を問題視した情報を秀吉に送っていたと考えることはできず、またこれ以前に秀吉から家康に対し関東での「無事」に対する督促があったことも確認できない。以上から、秀吉が北条氏を問題視するのは、その情報が関東諸氏のいずれから届いていること(九月三日付書簡)に基づくためと考える。

(85) 藤井氏注(1) 論文。

(86) (天正十一年) 十一月十五日付徳川家康書状 (『武州文書』、『神奈川県史』資料編3 古代・中世(3下)、一〇〇七頁) は、竹井氏注(5) 論文二九頁、佐々木氏注(4) 論文三五頁以降により、史料10を受けて出されたこととされるが、本稿でもこの見解に従う。また、このように秀吉からの要請を受ける形で家康も即座に対応していることから、特に抵抗があったとは考えられない。なお、尾下氏は本注史料が天正十一年であることには留保されるが、この時の家康の動向については、竹井・佐々木両氏と同様に「秀吉からの『物無事』実現の要請を拒絶した形跡は見出せない」とされる(尾下氏注(5) 論文、八七頁)。

(87) (天正十一年) 十二月朔日付北条氏直書状 (『原文書』、『戦国遺文』第三卷、二五八頁) に「廿七日注進状、今朝日辰刻参着披見候、仍新田・館林・足利ト合、其地へ相動處、於諸口防戦得勝利」とあることから、この時戦闘状態に至ったことが知られる。なお、これについては齋藤氏注(46) 著書、五四頁以降に詳しい。

(88) ただし、織田家家督であった織田信雄についても「家忠日記」天正十一年十一月廿日条に「小田三介殿上にて御腹めされ候風説候」とあるように、ほぼ同時期に秀吉から見て煙たい存在として扱われ、また秀吉による実力行使に出る直前と認識される状態であったことが知られる。以上より、小牧長久手の戦いへと推し進めた人物は家康だけに特定できるものではない。

(89) 筆者注(12) 論文参照。なお、同時期に刊行された齋藤氏注(46) 著書、第4章でも同様の分析が見られる。

(付記) 本稿は、歴史学研究会日本近世史部会二〇一〇年十二月例会での報告を元に作成したものである。本報告では運営委員をはじめ多くの方にお世話になり、また参加者からは多くのご教示を得ることとなった。ここに記して礼としたい。